



# くすりと健康

● 神戸市薬剤師会 ●

## 薬の体内での働き

薬の服用方法には、さまざまな方法がありますが、最も一般的なのは、口から服用する方法です。ほとんどの薬は、体に入った後、血液などに混じって目的の場所に到達し、効果を表します。ここでは、口から服用した薬がどのような過程をたどるのかを、簡単に説明します。

薬は、口から食道を通って胃に入り、胃酸という消化液に溶けます。溶けるためにはある程度の水分が必要ですので、服用するときは必ずコップ1杯くらいの水で飲むようにしましょう。もし水ではなく炭酸飲料など、他の飲料で飲むと、消化液の状態が変わり、溶けにくくなります。また、経口投与では、すでに消化管内に存在する食物や薬によって、新たに入ってきた薬の吸収量や速度が左右されることがあるため、飲む時間が

空腹時や食後食間などと指定されています。こうして薬は、胃のぜんどう運動によって腸へ運ばれながら、栄養素と同じように吸収され、血液に入っていきます。

薬が血液からいろいろな臓器や組織に運ばれることを「分布」といいます。多くの薬は、血液の中で血漿（けっしょう）タンパクにくっついて運ばれますが、そのままでは力を発揮せず、血漿タンパクから徐々に離れていって力を発揮します。この血漿タンパクに何らかの影響が与えられると、薬の効果が変化したり、副作用を起こしたりします。例えば2種類の薬を飲んでいたとすると、もし一方の薬が血漿タンパクとくっつき力が強い場合、もう一方は追い出されて、1種類の薬の作用だけが強く出てしまいます。

薬はもともと体には異物なので、ずっと体内にとどまるのは好ましくなく、体は薬を害のないものに変え

ようとします。それが「代謝」です。

代謝は主に肝臓で行われます。肝臓には多くの酵素があり、酵素の働きで酸化、還元、加水分解などを行い、薬は無毒化されます。もし、肝臓へやってくる血液の流れや酵素の働きに何らかの影響が加わると、いつまでも薬が力をもったまま体内に残り、思わぬ副作用を引き起こすことがあります。お酒はこの酵素に影響を与える最も有力なものの一つです。肝臓の病気をもつ人も、注意が必要です。肝臓で代謝された薬は腎臓に運ばれ、そこで尿となって体内へ排出されます。

薬の効果を最も発揮するために、時間や量、飲む方法を守ることが大切です。また、薬の保管方法が不適切だったり、保管期間が長すぎると、変性して効果を失ったり、有害物質になる場合がありますので、添付文書やラベルの指示をよく読んで服用するようにしてください。